

現地の植物学者との交流

筑波大学第二学群生物資源学類 鈴木康平

私は植生学の見地から、沙漠化に対して貢献することを目指して日々研究を行っており、現在、モンゴルやチュニジアといった半乾燥・乾燥地域を研究フィールドとしている。私が参加している調査では、植物を同定してもらうために、毎回現地の植物学者に同行してもらうのだが、今回は、モンゴル調査とチュニジア調査における現地の植物学者との交流から感じたことについて述べたいと思う。

モンゴルでの調査は、私が初めて参加した現地調査でとても思い出に残っている。この調査に同行していただいたモンゴルの植物学者はツンデックフー先生という方で、とにかくお酒が大好きな先生だ。毎晩ウォッカをニコニコうれしそうに飲んでいて、しかし、一度植物を相手にすると、同定中は1時間でも2時間でもその場を離れないし、同定中は私を全く相手にしてくれなかった。初めての調査で、全然知識がなかった私を毎日のように叱ってくれたのも、とてもいい思い出である。モンゴル調査の次に参加した調査がチュニジア調査であった。この調査に同行していただいたチュニジアの植物学者は、スマウイ先生という方であった。とにかく元気で愉快的な先生で、私が調査中に飲み物休憩を取ろうとすると笑いながら何休憩してるんだと怒ってきたり、突然私に100m走の勝負をしようと提案してくるような先生だ。ツンデックフー先生同様に、植物を本当に愛している方で、再同定を行なうための植物標本を取ろうとした際に、この植物は地上部だけで同定できるから、また生えてこられるよう、根を残しておくようにと言われたことがとても印象に残っている。

両先生とのふれあいを通してまず感じたことは、両先生とも植物に対して強い畏敬の念を感じているのではないかということだ。モンゴルは、森林や沙漠を有するものの、国土の大部分を草原に覆われた国である。近年、草原退行や農耕放棄地の拡大が問題となっており、環境が厳しい国であると言える。同様にチュニジアは、沿岸地域はそこまで厳しい環境ではないと思うが、ひとたび内陸部に入ると、植被率が極めて低く、乾燥耐性や塩類耐性を持つ植物種で構成された景観やナツメヤシのオアシス栽培のような限定された地域でのみの作物生産など極めて過酷な環境であると言える。きっと両植物学者の根底には、このような厳しい環境下で形成された限られた資源への強い思いがあるのではないだろうか。このことを通して、私は改めて、風土はその土地の人々の考え方や価値観に大きく影響を与えるのだらうと感じた。そしてそれと同時に、植物学者に影響を与えているように、

その土地に住む全ての人々の考え方や価値観も風土に大きく影響を受けているのではないかと感じた。現に、私はモンゴル人とチュニジア人から、とてつもないたくましさや我慢強さを感じている。極寒の中、わずかな草資源を家畜に食べさせ、痩せ細る家畜とともに春を待つモンゴル人はなんとたくましく我慢強いことだろう。様々な工夫を凝らして作物を育てるチュニジア人はなんとたくましく我慢強いことだろう。昨今、世界の沙漠化に関して、悲観的なニュースなどをよく耳にするが、個人的にはそこまで悲観的にはとらえていない。なぜならば、沙漠化に直面している地域の人々がそう簡単に屈するとは思えないからだ。これらの地域の人々は我々の想像を絶するような力と無限の可能性を持っていると思う。それゆえ、私たちのような研究に携わる人間が沙漠化に取り組む上で一番大切なことは、これらの地域の人々が沙漠化に対してどのように向き合っていけばいいのか、向き合っていかなければいけないのかということを示してあげること、それと同時に、向き合い方を示せる現地の人を一人でも多く育成することであると考えている。また、考え方や価値観が違うのだから、対象とする地域の人々の考えを尊重することも非常に大切であると思う。このような視点を持ったうえで、私は今後も研究に勤しみ、沙漠化に対して貢献できることを模索していきたい。

二つ目に感じていることは、現地の学者との信頼関係を得ることの重要性と、その難しさである。現地の学者との信頼関係が調査の成果を大きく左右することは言うまでも無いだろう。モンゴル調査とチュニジア調査では、私と同行している方々が強い信頼関係を築いていたからこそ、私に対しても熱心に相手をしてくれたのだと思う。もし私だけでは、こうはいかなかっただろう。現地の学者の信頼を得るには、熱意はもちろんであるが、何よりも研究に関してどれだけ深い知見を持っているかが重要であると思う。いくら熱意があっても、結局それが伝わるのは、研究に関する議論を通してであろう。私はまだまだ底が浅いので、もっと勉強をして、一人で現地の研究者と関わることになっても信頼を得ることができる人間になりたい。

三つ目に感じていることは、モンゴル、チュニジアそれぞれの植物学者から多くのことを学び、これから先実践していかなければならないということだ。両先生からは本当に多くのことを学んだ。第一は、いつまでも学ぶ姿勢を強く持ち続けるということだ。スマウイ先生に、「植物を覚える上で最もいい方法は何か」と聞いたところ、「植物を覚え続けることだ」という返事が返ってきた。

スマウイ先生のようなすばらしい植物学者でさえも、そのような気持ちを持ち続けていることに私は感銘を受けた。私は物事を極める上で決して楽な方法などなく、地道に続けることが最短距離であるということを絶対に忘れないように思う。第二は研究に対して真摯であることだ。ツンデックフー先生もスマウイ先生も調査中、決して手を抜くことをしなかった。分からない植物を分からないままで簡単に終わらすということを絶対しなかった。私は日本で植物観察を行なう際に、植物が分からないときそのままにしてしまうことが多々ある。このことが二人の姿勢を見て、とても恥ずかしい姿勢だと思った。現在、日々の植物観察では、以前よりもずっと、図鑑とにらめっこしている時間が増えたと思う。しかしながら、両先生の姿勢に比べたらまだまだなので、もっともっと真摯に取り組みたいと思う。第三はとにかく楽しく元氣

に調査を行なうということだ。両先生とも調査中、本当に楽しそうに元氣に調査を行なっていた。そして、二人の元氣につられて、調査隊全体の雰囲気も良くなっていた。きっと調査を行なう上で、明るく楽しく調査を行なうということはとても大切なことなのだと思う。たとえ大変な調査をしているときでも、疲れているときでも、調査中は心の底から楽しんで、元氣に調査を行ないたい。そして、自分の元氣で調査隊全体を元氣にできたらいいなと思う。これから先、様々な調査に取り組む上で、これらのことをいつも心に留めておきたい。

最後に、両先生に出会えた事を私は何よりも幸せなことだと感じている。そしてこのような機会をいただけたことに本当に感謝をしている。まだまだ未熟ではあるが、両先生のような研究者を目指して、これからも頑張って研究を続けていきたいと思う。